

彼が意識のある最後につぶやいた言葉は、「ちきしょう……！」であったように聞く。私には分る。これに引続いて彼がつぶやいた言葉が……。「もう少しで研究が完成するのに」であったに違いない。

擦文文化の研究を切り開いてきた北海道が生んだ俊英の考古学者が突然に世を去ってしまった。それは私達にとって、あまりにも大きい打撃であった。本当に、そしてあまりにも突然でありすぎた。研究の展望については何も語ることなく、石附さんは急にいつてしまった。後に残された仕事は、何とか皆で進めていくつもりです。石附さん、どうか安らかに眠り下さい。

合掌
(札幌大学文化学科非常勤講師・北海道大学助教)

石附さんの思い出

木村英明

札幌で一番美しい春の訪れを待たずに、一九八六年三月二十七日、石附喜三男教授が急逝した。研究の良き先輩として、また大学の同僚として、私が考古学研究の道に足を踏み入れて以来二十六年間、常に前にいつづけた石附さんであった。

一九六〇年の四月、北海道大学理学部地質学鉱物学教室研究生の吉崎昌一さん（現在北海道大学文学部助教）を発掘担当者に、長沼町幌内堂林遺跡の第一次発掘調査が実施された。私が高校二年生に進級した

ばかりの時で、水をたっぷり含み黒々した土、その土に今にも消え入りそうに残る雪の小さな塊、畑にころがるワサビなど、馬追丘陵にもようやく春の匂いがただよいはじめた頃である。札幌西高校郷土研究部の出身者を主体に組織された調査には、考古学専攻の道にすすんだ野村崇、斎藤傑、森田知忠、雪田孝、地質・鉱物学専攻の道にすすんだ緑川武の諸先輩や、考古学や地質学とは異なるそれぞれの道にすすんだ吉田茂、出村文理、有馬元明の諸先輩が集まり、手伝いとして三年生の藤森武夫、二年生の宇田川洋と私が参加した。そのうえ北海道の縄文時代の墓の権威・藤本英夫さん（当時静内高校教諭）や浦河郷土研究会の黒崎康夫さん、明治大学学生の桑原護さん、地元参加の高校生や有志の方々多数が特別参加し、珍しく賑わいをみせていた。この中にもうひとり、西高郷土研究部出身の顔があった。同志社大学の文化史学科で学ぶ石附喜三男さんである。これが、石附さんとの出会いであったと記憶している。

春とはいえ、朝晩の冷込みはまだまだ厳しい。しかも明りのない小屋での暮しに、早めに寝袋に体を沈める毎日であった。しかし、薪ストーブからもれる明りを頼りに、話しは夜遅くまで続いた。もっぱら懐かしい高校生時代の思い出話しやそれぞれが通う大学、研究室、そして考古学に話題が集中した。当然ながら、前の年に郷土研究部が発掘し、話題を巻きおこした栗沢町由良遺跡の竪穴住居址と土師器一式や、堂林遺跡に近い長沼町幌内の擦文時代遺跡の話しに及び、編年の問題がさかんに論じられていた。ここでの主役は、石附さんであった。口角あわを飛ばしながらの熱弁はなかなかの迫力があり、他を圧倒していた。本場の織内で土師器や須恵器に関する最新の研究に直接触れていた氏には、最も得意とするところであり、やがて終生の研究テーマになっていく課題でもあったからである。その場のほどよい緊張感と、情熱的な石附さんの姿は、今でも脳裏に焼きついている。この時

私は、難解な用語にたじろぎながらも、話しに引きこまれ、聞きのがすまいと必死に耳をそばたてていたことを記憶している。また話とぎれた時には、きまって京都のうたごえ喫茶「炎」や東京新宿の「灯」で仕込んできたという当時はやりの学生愛唱歌が誰彼からとなく飛出し、瞬時にして合唱へと輪がひろがる。勢いあまって、未だウブ？な私たち現役組がやや戸惑うような歌も飛出したことを覚えている。このような時も、自慢のノドを披露し、合唱をリードしていたのが石附さんである。調査の合間をぬって、相撲の相手をさせられたのも、今は懐かしい。

一方調査の方も、わずか五日間という短期間の、しかもワサビをおかずがわりに食べるような貧乏発掘ではあったが、貴重な成果をおさめることができた。発見された土器がこれまでにない型式のもので、堂林式土器と命名され、北海道考古学の研究史の一ページを飾っている。堂林遺跡は縄文時代後期のタイプサイトとしての榮譽を受け、その位置は今日なお変わっていない。

今にして思うと、夢多き時代の、堂林遺跡での発掘体験は、私のその後の進路を決める極めて大きな事件であったのである。一緒になっただけの仕事をなすとげていく発掘、それを研究する考古学の魅力に取りつかれ、先輩らが通う大学への進学を思いついたのはこの時である。何よりも、経済的条件のなかった私をして考古学への道（当時では本州の大学への進学を意味）をすすむことに決意させたもつとも大きな理由は、良き先輩たち、中でも当初から強烈な個性を見せつけた石附さんとの出会いがあったことにある。

それからちょうど八年、その石附さんと偶然にも札幌大学の文化交流特別研究所で仕事をするようになった。石附さんは私より一年早い開学時にすでに赴任しており、私の恩師、杉原荘介教授の紹介で、当時研究所の所長をしていた江上波夫教授の論文審査と面接を受け、同

研究所助手として私が勤務することに内定した時には、心から喜んでくれた。そして正式な辞令がおりる前から諸先生たちに紹介され、あげくの果て盛大な歓迎宴を催してくれたことがあった。（ちょうど秘密裡に教職員組合が結成された時で、先頭切って走り回っていた石附さんにしてみれば仲間一人が増えたという気持ちも手伝ってである）。その際、北海道考古学の発展に貢献し、札幌大学文化交流特別研究所の社会的評価を高める、特に道内の大学には考古学の教育機関がないことから、後進の育成に努めることを約束しあった。しかし、バラ色の時代は長く続かず、合理化による研究所予算のカット、その影響で江上所長の転出、果ては給与の遅・欠配など、最も困難な時代を迎えるが、何はともあれ学生の教育だけは力を抜くまいと、予算のやりくりをしいながら調査を続けた。その結果、専攻を持たない本学から、まがりなりにも考古学を職とする者が道内のあちこちに育ち、どうか社会的責任の一端を果すことができていく。それもこれも、石附さんの学生への寛容さと指導力に負うており、石附さんを失った今、責任の一切は私の肩に重くのしかかっている。しかし、石附さんが残した遺産は大きく、また卒業生の協力もあって、この道での本学の社会的評価をさらに発展させていけると確信できるのである。

石附さんは、一九五五年以来若きリーダーとして北海道での考古学研究を一貫して指導してきた。それまであまり重視されることのなかった擦文文化について、北海道の先史時代の中の重要性を早くから見抜き、擦文文化研究の基礎を築いてきたことで、その功績が高く評価されている。この石附さんの擦文文化研究に関する評価は、斎藤傑さんの「擦文文化について考えるためのメモ」（『市立旭川郷土博物館研究報告』第七号・第八号、一九七一年）に最も詳しい。

ところで一九五〇年代といえば、北海道にあって先土器文化研究がもてはやされた時代であり、「実自分としては先土器文化研究を希

望していたんだ”としばしば私にもらしていたようにいくらか迷いもあったようであるが、結局は擦文文化の研究を一生の仕事に選んでいる。これには、石附さんの西高郷土研究部での体験が大きく影響しており、また同クラブ出身者の多くが東京にある大学を選ぶ中で一人関西にある大学を選んで自身の先見性がそれを助けている。

石附さんが入学する前年の一九五三年、郷土研究部顧問の奥野清介教諭は生徒とともに、根室市西月ヶ丘遺跡の調査にでかけている。珍しいものを掘りあてたいとはやる気持ちの生徒をおさえ、まず遺跡全体の測量を実施している。その結果、住居址と思われる凹みが二四五基確認できたという。この調査方法は、当時としては画期的なものであったといえる。残念ながらまもなく奥野教諭が他界され、ここでの仕事の様子については考古学界に紹介されずに終わっている。奥野教諭の指導者としての秀れた資質は、こうした地道な調査、科学的な調査の重要性を身をもって体験させる点によく示されている。このような良き指導者のもとで、一九五四年の夏二十日間にわたって天売・焼尻島の遠征に一年生の石附さんは参加している。その時発掘されたのが、擦文時代の竪穴住居址である。翌年には瀬棚に、さらに次の年には積丹半島の調査に参加している。

しばしば『西高新聞』に、“西高郷研の擦文文化の資料の数は日本一”と紹介されているが、その基礎は石附さんの時代に築かれている。高校のクラブ活動にすぎないが、指導者といい、発掘の体験といい、また資料の豊富さといい、石附さんが擦文文化に関心を持つには充分な環境があった。

この後、同志社大学文化史学科にすすみ、やはり酒詰伸男博士という良き指導者を得て、本格的に考古学の研究方法を学んでいる。そして、同志社大学の研究室が行った積丹半島の泊村神恵内観音洞窟の調査で、擦文文化層が層位的に存在するという事実を知り、また先に紹

介した(石附さん自身は参加していないが)栗沢町由良遺跡で発見された土器に接し、この時代に早くも石附理論の枠組みができあがっている。特に由良遺跡発見の土器は、擦文式土器とは区別される八世紀末の土師器に属し、“擦文式土器、および擦文文化は、本州の土師器およびその文化の地方化したものであるという”石附理論の基礎をなしている。

その後の研究は、もっぱら擦文文化から「近世アイヌ」期にかけてみられる、土師器や須恵器、方形のカマドを持つ住居とネズミ返しのある高床式住居、刀子・蔵手刀・毛抜大刀や鍬(鋤)先などの鉄器類、古墳、紡錘車と織機、農耕作物と農耕用具など、本州系の文物と文化要素の抽出、それぞれの比較をもとにした細分と編年(実年代)の確立、擦文式土器および擦文文化、引いてはアイヌ文化の成立過程を解明することに中心が置かれてきた。そして、「北海道式古墳」の研究に原形が示されて以来、北海道の先史時代、少なくとも擦文時代以降の基層文化は南方からの影響によって形成されたというのが、石附さんの研究を貫いてきた見解と言えよう。

文物における類似・影響が動かしがたいとはいえ、擦文文化の成立は北海道での主体的変化と考える点や、またどちらかといえば北方的視点を強調しがちな私とは、意見を異にし、しばしば激論をたたかわすこともあったが、人一倍シベリアに関心を示し、ロシア語関係の蔵書は有名である。二人で約束したシベリア旅行が実現できずに、いかにも残念である。また最近、「肅慎Ⅱ鈴谷式土器人」仮説が新たに登場し、いよいよ民族成立に関する氏の全体像が示されようという時期に他界し、北海道考古学研究での損失は大きい。

昨年出版された『北海道考古学教室』シリーズ(一光社刊)は、二人の、というより西高郷土研究部出身者による最後の共同作業になってしまった。うち第五巻の『鉄文化のはじまり——アイヌの祖先の生

『活』を石附さんが執筆した。刊行までの間、私事で種々ご迷惑をかけたしまったが、推進役の石附さんの努力で世に問うことができた。これより十八年前の一九六七年、『古代文化』誌上にやはり郷土研究部出身者による「北海道古代史特輯」がくまれている。この企画立案者がこれまた石附さんであった。私の処女論文が収録された思い出多き企画であった。このように時々の研究を総括するかのように、郷土研究部出身者が寄り集って企画を打出してきたが、つい最近まで西高生の指導に当たられてきたほどに郷土研究部に愛着を抱き続けてきた石附さんのなき今、こうした企画はふたたび実現しないようにも思われるのである。この点でも、大きな損失である。

書き綴りたいことが多すぎ、冗漫にすぎたようである。出会いの当初から強烈に印象づけられた牽引者としての資質は、終生変らぬものであった。最後勢いあまって冥界にまで足を踏みいれてしまったようである。惜しんでも惜しみきれない石附さんの死である。

「エジプト人の言うところでは、地下界を支配するのはデメテルとディオニソスの二神であるという。また人間の霊魂は不滅で、肉体が亡びると次々に生れてくる他の動物の体内に入って宿る、という説を最初に唱えたのもエジプト人である。魂は陸に棲むもの、海に棲むもの、そして空飛ぶもの、とあらゆる動物の体を一巡すると、ふたたびまた生れてくる人間の体内に入り、三千年で魂の一巡が終わるといふ」。ヘロドトスの『歴史』にある話である。一足早く冥界に足を踏みいれてしまった石附さんのために、最もふさわしいミイラを作ろう。三千年後、ふたたびお会いするために、それまで地下界での考古学に
お楽しみあれ。ご冥福をお祈りします。